小さな弟、良ちゃん

小川未明

青空文庫

良ちゃんは、お姉さんの持っている、銀のシャープ＝ペンシルがほしくてならなかったのです。けれど、いくらねだっても、お姉さんは、

「どうして、こればかしは、あげられますものか。」と、いわぬばかりな顔つきをして、うんとはおっしゃらなかったのでした。

お姉さんは、良ちゃんをかわいがっていました。英ちゃんや、義雄さんよりも、かわいがっていました。それは、良ちゃんはまだ小さくて、やっと今年から学校へ上がったばかりなのですもの。

「お姉さん、その光った、鉛筆をおくれよ。」と、また思い出したように、お姉さんのところへやってきました。いままでにも、だめといったのが、無理に頼めば、しまいにはきいてもらえたので、シャープ＝ペンシルにしても、いつか自分のものになると思ったからです。

「これぱかりは、だめよ。」と、お姉さんは、おっしゃいました。

「だめ？　じゃ、ちょっと僕に見せておくれよ。」と、良ちゃんは、小さい手を差し出しました。

「だめよ。なんといっても、これは、良ちゃんにあげられません。お姉さんが、使っているのですもの。」

「見せて、おくれよ。」と、良ちゃんは、けっして、自分のものにはしないから、ただ手に取

らしてよく見せてくれないかということを、顔色に現していました。

「ええ、見せてあげますわ。けれど、あげるのではなくてよ。」と、いって、お姉さんは、ハンドバッグから、シャープ＝ペンシルを出して良ちゃんの手にお渡しになりました。

良ちゃんは、いつかもこうして、無理に美しい、コンパクトの容器をもらったことを思い出すと、今度も、これをもらえるのでないかと思いましたから、

「僕、これほしいな。」といって、銀の軸に小さな英語の彫ってあるのをじっと見ていますと、

「こればかしは、いけないの。」と、お姉さんは念を押すようにおっしゃいました。

「僕の持っているもの、お姉さんにあげるけどなあ。」と、良ちゃんは、いいました。

「ほほほほ、良ちゃんは、どんなものを持っているの？」

「僕だいじにしているものがあるのだよ。」

「どんなもの、良ちゃんのだいじにしているものって、なんでしょう？」

「あれと代えてくれる？」

「それはわからないわ。どんなものか、私知らないのですもの……。」と、お姉さんは、良ちゃんを見下ろして、お笑いになりました。

「こまと、水鉄砲と、まりと、ろうせき……。水鉄砲は、いつまでも貸しておいてあげるから……。」

「ほほほほ、良ちゃん、私、そんなもの、なんにするのよ……。」と、いって、お姉さんは、

良ちゃんのほっぺたをぷっと吹きました。

良ちゃんは、心持ち顔を赤くして、

「じゃ、みんなとなら、ペンシルと代えてくれる?」と、熱心にいいました。

お姉さんは、かわいそうになりました。

「私、今日、デパートへ寄るから、良ちゃんにいいのを買ってきてあげるわ。」と、お姉さんは、いいました。すると、たちまち、良ちゃんの目はかがやきました。

「ほんとう? お姉ちゃん、僕にぴかぴかした、シャープ＝ペンシルを買ってきてくれる?」と、良ちゃんは、急に元気になりました。

「ええ、きっと、光った、いいのを買ってきますよ。お姉さんは、お約束をして、うそをいったことがないでしょう?」

「うん。」と、良ちゃんは、うなずきました。そして、お姉さんの銀のシャープ＝ペンシルをお返ししました。

その日、お姉さんは、外からお帰りなさると、

「ぴか、ぴかしたのを、買ってきた?」と、良ちゃんは、飛び出しました。

お姉さんは、ニッケル製の子供持ちのを買ってきてくださいました。良ちゃんは、喜んで、

「どうも、ありがとう。」と、いって、お姉さんにお礼をいいました。そして、それをさっそく洋服のポケットに差して、お友だちに見せようと遊びに出ました。

「良ちゃんには、光っていれば、みんな銀になって見えるのね。」と、お姉さんは、その後ろ姿を見送りながらおっしゃいました。お姉さんには、その無邪気なのが、なんとなくいじらしかったのです。

　きょうも、また、良ちゃんは、兄の英ちゃんに、釣りにつれていってくれと、泣かんばかりにして頼んでいました。

「やだ、おまえ一人でゆけばいいだろう。だれかお友だちを誘って……。」と、英ちゃんは、いっていました。

「ねえ、つれていってよ。」と、良ちゃんは、頼んでいました。英ちゃんは、釣りざおの糸をしらべたり、浮きをつけかえたりしていましたが、

「もう生意気なことはいわんな。はいといえばつれていってやる。」と、いいました。

「もういわんから、つれていってね。」

「ああ、よし。」

「うれしいな。」と、良ちゃんは手をたたいて飛び上がりました。

「みみずを取りにゆくのだから、これを持っておいで。」と、英ちゃんは、いいました。

　小さな良ちゃんは、片手に紅茶の空きかんを持ち、片手に手シャベルを握って、兄さんのお供をしたのです。

「まあ、威張っているわね、にくらしい。」

窓から、小さな兄弟、二人の話をきき、出てゆく後ろ姿が見送っていたお姉さんは、いいました。

そのうちに、二人は、みみずをとって、帰ってきました。

「お母さん、早くご飯にしておくれ、みんなと釣りにゆくのだから。」と英ちゃんが、いいました。

「良三、途中で帰るなんていったら、なぐるぜ。」と、英ちゃんがいいました。

「ああ、いいよ。」

これをきいていたお姉さんは、もうたまらなくなりました。

「良ちゃん、釣りになんかゆくのをおよしよ。」と、お姉さんは、いいました。

「なんで？　僕、ゆきたいんだもの、いってはいけないの？」と、良ちゃんは、泣き出しそうになりました。

「だって、そんなにまでしていきたいの？」

「うん、ゆきたい。」

「じゃ、いらっしゃい。英ちゃん、あんまり良ちゃんをしかったら、ひどいから。」と、お姉さんが、いいますと、

「じゃ、つれていってやらないよ。」と、英ちゃんは、いいました。良ちゃんは、泣き出してしまいました。そのとき、お母さんが、

「さあ、ご飯ができましたよ、仲よくしていっていらっしゃい。」と、おっしゃいました。良ちゃんは、ご飯を食べる間も英ちゃんの機嫌をとっていました。

そのうちに、みんなが外へ迎えにきました。二人は「いってまいります。」をしました。

「気をつけてね。」といって、お姉さんとお母さんは、見送ってくださいました。

英ちゃんは、さおを持ち、良ちゃんは、片手に、みみずの入った紅茶の空きかんを持ち、片手にバケツをぶらさげていました。ほかの男の子たちも、さおとバケツと紅茶の空きかんを持っていました。

お姉さんは、これまで見た、紅茶の空きかんといえば、たいていリプトンであったのが、いつのまにか、みんな和製を使用するようになったとみえて、リプトンの空きかんは、一つもないと思われました。ここにも、世の中の変化があらわれているような気がしました。

「良ちゃんは、さおがないの?」と、お母さんが、おききなさると、

「こんなものに、なにが釣れるかって……。」と英ちゃんが、笑いました。

「まあ、ご苦労な、ただバケツを持ってお供をするだけなの。」と、お姉さんは、ほんとうに、良ちゃんがかわいそうになりました。

はや、みんなの姿は、かなたの道の上に小さくなりました。

「かわいそうに、それをつれてゆくとか、ゆかぬとか意地悪をしてさ。」と、お姉さんは、涙ぐみました。

「いえ、みんな小(ちい)さいうちは、それで楽(たの)しいんです。大(おお)きくなると、わかってきます。」と、お母(かあ)さんは、おっしゃいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　10」講談社
　1977（昭和52）年8月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第6刷発行
初出：「子供のテキスト」
　1935（昭和10）年8月
※表題は底本では、「小《ちい》さな弟《おとうと》、良《りょう》ちゃん」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：仙酔ゑびす
2012年7月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな弟、良ちゃん

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/